



別名：ヒラセイチゴ

日本植物界の二巨匠 発見・命名

オオトックリイチゴ

日本の植物学の父・牧野富太郎と福井出身・平瀬作五郎

【学名：Rubus Hiraseanus Makino】彦根城内のみの固有種

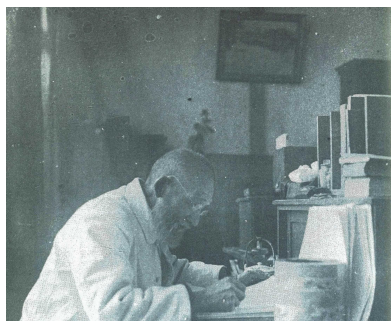


今も輝き続く

研究者平瀬の足跡

オオトックリイチゴはバラ科キイチゴ属の一種で、ナワシロイチゴとトックリイチゴの自然雑種。発見者は日本の植物学の父とも称される牧野富太郎(1862~1957)と、イチヨウの精子を発見したことで知られる平瀬作五郎(1856~1925)。彦根市教委文化財課によると、彦根城以外では知られていない固有の植物だという。

牧野が明治27(1894)年11月に、伊吹山で植物採集をした帰りに彦根城に立ち寄り、表御殿跡(現・彦根城博物館)で発見。明治34年7月と翌年6月に、彦根尋常中学校(現・彦根東高)に在職していた平瀬が牧野の依頼で標本を作成。牧野は新種と判断し明治35(1902)年に『植物学雑誌』第16巻に記載発表しました。牧野は、学名の種小名に標本を作成した平瀬の名を献じ、自分は命名者としています。



彦根中で勤務中の平瀬作五郎

近代植物学の創成期

我が国の近代植物学の草創は、明治10(一八七七)年代の東京帝国大学(現・東京大学)植物学教室を中心に展開されました。当時は、まだ先例のない研究で学生も少なく、情報も人材も不足する時代でした。そのような状況のなか、植物愛好家の牧野富太郎と、画工としての腕を買われた平瀬作五郎のノンキャリアア研究者二人を植物学教室が受け入れ、明治26(一八九三)年二人は同時に助手に任命されました。

同じ時代に異なった生き方をした牧野富太郎と平瀬作五郎。小学校を中退した牧野は学歴より実力、自分の研究を妨げ圧迫するものにはたとえ教授であろうと毅然と立ち向かう、そんな性格。その一方平瀬は寡黙で、地味で自己主張の少ない性格の持ち主。このふたりが近代植物学の草創期に活躍をしたのです。

世界を驚かせた大発見 『イチヨウの精子発見』 平瀬の恩賜賞受賞

平瀬作五郎の発見・人物について、牧野富太郎はこう解説している。「こんな重大な世界的発見をしたのだから、普通なら無論平瀬氏は易々と博士号ももらえる資格があるといつてよいものであったが、世事魔多く底には底があつて、不幸にもその栄冠をかちえなかつたばかりでなかつて江州は琵琶湖畔彦根町に建てられてある彦根中学校の教師として遠く左遷せられる憂目をみたのは、憐れというも愚かな話であつた。けれども赫々たるその功績は没すべくもなく、公刊せられた『大略』上におけるその論文は燦然としていつまでも光彩を放っている。宜べなる哉、後ち明治四十五(一九一二)年に帝国学士院から恩賜賞な



植物学の父 牧野富太郎

〔一八六二~一九五七〕

らびに賞金を授与せられる栄光を担った」(牧野富太郎著『植物一日一題』より)

牧野富太郎は、文久2(一八六二)年に高知に生まれ、幼少から植物の知識を身につけ、明治17(一八八四)年に東京帝国大学(現在の東京大学)理学部植物学教室へ出入りするようになり、以後、精力的に研究発表を重ね、『日本植物志図篇』や『大日本植物志』などの刊行にたずさわり、明治22(一八八九)年には日本ではじめて新種のヤマトグサに学名をつけています。昭和15(一九四〇)年に刊行された『牧野日本植物図鑑』は、現在まで改訂を重ね、植物図鑑として広く親しまれています。